第４章

活動者の感想

この１年間、神戸大学総合ボランティアセンター通じてボランティア活動をした学生からの声を伝えます。
また、総ボラの運営をしてきたメンバーたちが今総ボラに思っていることを書きました。

ボランティアをやってみて

総ボラを通じてボランティア活動に参加したメンバーの声を伝えます。

服部訓子（法・３）

私が本格的にボランティアをやりはじめたのは、去年の６月にこの神戸大学総合ボランティアセンターに入ってからです。それまではボランティアには興味はありましたが、何か入りづらくてなかなか最初の一歩が踏み出せませんでした。でも高校を卒業し、大学生になってからは時間もできたんだから、今度こそボランティアをやってみようかなとおもい、いろいろボランティアに関する本を買って検討する毎日でした。でもなかなかぴったりした団体を見つけられずにいるうちに時は流れていったのです。そんなある日、大阪市の広報誌で「点字教室を開催するので受講生を募集しています。」という記事を見つけた私は、これだ！と思いすぐに申し込みをしました。それから、二回生の１０月頃まで通うことになるのです。点字をやり始めた頃は、点字の技術を習得してその技術を使って何かできたらいいなぁという思いと、先生も視覚障害者だったということもあり、普段あまり接する機会のない障害者の人のことを知れるかなぁという気持ちで週に一回通っていました。そこで一緒に点字を習っていた人の中には本当にいろんな人が居ました。ほとんどが女性でしたが、学校に点字クラブをつくることを目標としている先生や福祉施設で働いている人、ぼけないために手を動かすことをしたいからと言うおばあさんや、時間の余裕のある主婦の方とか色々でした。そんないろんな人に会えると言うことではとても良かったのですが、やはり技術の習得を目的としている講習会ですから障害者の人と会う機会はなかなかありませんでした。私はもともとボランティアをやってみたいと思っていたので何か物足りなさを感じていたのです。神大にボランティアセンターができ、気軽にボランティアを出来るようになったのは画期的で、そんな私の物足りなさを満足させてくれる物でした。総ボラに入っていろんなボランティアをやりました。実際の活動をして得た物はたくさんあります。会うこともなかったであろういろんな人に会えたこと。今まであまり考えていなかった社会問題を自分の問題として捉えられるようになったこと。自分と違う考えを知れること。何も力もない二十歳の私でも社会に関わっているぞという手応え。思いがけないところで思いがけない人に助けられて、私っていろんな人に助けられて生きてるんやなぁと実感して、謙虚に生きなあかんなぁと思わせてもらえること。未熟な自分を未熟であると認めることが出来るようになったこと。あげるときりがありません。それほどまでにいろんな物を与えてくれるのがボランティアだと思います。私はまだまだボランティアをやって何かを悟ったというような大きなことは言えません。これからも言えないような気がします。でも、そこに人と人とのつながりがあり、問題を抱えている人のその問題が、実は自分の問題でもあるということに気がついた限りは続けたいと思っています。もう少し欲を言うとボランティアをやる人が増えて、その人達といろんなことについて語り合えたらいいなぁと思う今日この頃です。

四の宮　昇（工・４）

僕が総ボラに入ってからこれまでにやった、主な活動は、生田川児童館などで子供と遊ぶボランティアと、夏の青陽東でのカフェテリア、そして、いろんな避難所でのカラオケ隊の活動でした。

僕はいつも、僕がボランティアの活動をすることによって、接する人たちに「うれしい」とか「楽しい」というふうに感じてもらい、また僕も、その気持ちを共有できたら、というふうに思っていました。ですから、子供と遊んだ帰り際に、「お兄ちゃん、ありがとう。また、遊ばな。」と言ってくれたり、避難所カフェテリアで「わしは酒も煙草もやらへんから、このカフェのコーヒーが、何よりの気晴らしや。」などと、おっしゃってくださるのを聞くと、本当にうれしかったです。ああ、この活動をやって良かった、と心から思いました。

しかし、反省すべき点も多々あります。

これらの活動はどれも、身障者介助や震災直後の炊き出しなどに比べて、必要性の薄い物です。ボランティアがいなくても、子供たちは、勝手に遊びますし、カフェやカラオケがなくっても、避難者の方々は生活することができます。それだけに、目的や方向性を、はっきりとした形で持つように努力する必要があると思います。それぞれの活動に対して、「なぜ、何のために、その活動をするのか。」ということは考えていましたが（この詳細はそれぞれのセクションのレポートで示されているでしょう。）それを、もっと僕自身が明確な形で持ち、常に省みる、ということを怠ったため、それぞれの活動において、現状に満足してしまったり、逆に、どのように進めていけばいいのか、わからなくなってしまったりしたのだと思います。

目的と方向性を明確にして、常にそれを意識しながら、現状を省みて、次回の活動に反映させること。考えてみれば、当たり前のことなのですが、僕がボランティアをやって、身にしみて感じさせてもらったことです。

松本聡子（経営・４）

自分の生活が忙しかったので継続的には行いませんでした。しかし、ゲリラ的に参加はしていました。例えば、目の不自由な方に「地震の時にどう行動したか」というアンケートを取って目からうろこが落ちる経験をしました。自分が健常者であるので普段考えもつかないことを言われてどきっとしたことがあります。バスの○○行きの文字が小さくて見えにくいとか電車の運賃表が見えにくいので困るとか言われました。あまり意識したことがなかったので正直言って「あ、そうなのかぁ」と深々と感じた記憶があります。「相手の立場を意識する」というのを身を持って経験した出来事でした。

『子供たちと関わって』

植田　理緒（国文・２）

十一月十八日、久しぶりに生田川児童館の子供たちに会いにでかけた。風邪や何だかんだで、この前行ったのは一ヶ月程前である。今度もまた、「ボランティアのお姉さんが何だい！」という気持ちを込めた「ボランティア！」の言葉と、子供たちとの体をはった接触が始まるだろうな、と気を張って児童館までの道のりを行く。

私が初めて実際に子供たちのお世話をしたのは、阪神大震災で被災した淡路島の北淡町の子供たちを、京都の舞鶴までキャンプに連れていくという、夏の別の企画だった。被災した子供たちのデリケートな心に気を配りながら、同時に子供たちの純粋な美しい心に触れた体験であった。

夏休みが終わり、神戸の子供たちはどんなだろう、と不安を胸に抱きながら初めて神戸の子供たちと接した。震災から半年以上の月日が経っていたが、「子供たちが震災の心の後遺症として攻撃的になっている」というそれまでの報告を聞いて、心が不安に襲われていた。子供たちの取り扱いが非常に難しいのではないかと思った。反面、そういった難しい子供たちと心を通わせ支えあう関係になれれば、大変すばらしいことだろうな、と小さな期待を抱いていた。そんな様々な気持ちを胸に抱えたまま、児童館の入り口をくぐった。やいなや、スマイルのお姉さんに飛びついてくる子供たちが目に入った。驚いた。すごく元気である。私は、「よーし、みんなと仲良しになるゾ。」という意気込みで部屋に入った。ところが、ここが児童館の性質なのだろう、遊びに来ている子供たちの年齢までもがばらばらなのである。まだ、他の子供たちと何かをして遊ぶ、ということを知らない年齢の子もいれば、性格もばらばら、まさに多種多様の子供が居合わせているように思えた。あの時は、児童館の子供たちにまだ関係ができていなかったし、まとまりもなかった。子供たち自身が、お互いに気を配っていた。家にいてもゆったりとした心持ちでいられなっかただろうに、外へ出てまでも心に緊張を宿していたように思う。

週を重ねるにつれて、子供たちの数も増えていった。いろんな子が来るようになった。そんな子供たちのなかに、いじめも見られた。私は、その中に二つのものを見たように思う。一つは、「その子が、劣っている」という何かの根拠がないのに、こどもたちが集団になっていじめる陰険さ、である。まだあんなに歳のいかない人間に、あんな小さな体に、こんなひどい陰険さが宿っている、とは。「子供は天使である。」とよく言われるのに、まさに小悪魔を見たようだった。ぞっとした気持ちがした。いじめ、というものは、ボランティアや先生がいくら何かをしたところで、なくならないかもしれない。しかし私は、たとえ簡単でないにしろ、私たちボランティアのお兄さん、お姉さんがどの子にも心優しく接していれば、必ず子供たちは心の鎖を解き放ってくれて、子供たちの間に輪をつくりだしてくれる、と強く心に思い続けた。

もう一つは、年齢の大きい子供が、小さい子を威力で押さえ込んでいる姿と、同時に小さい子供が大きい子供に絶対服従している姿である。子供たちのたて社会を見たように思う。世の中には、いろんなたて社会がある

と思う。上の子供が下の子供に思いやりを持って面倒を見てあげていて、下の子供が上の子供に尊敬をもって従っている、そういう関係があるのと、ないのと、様々だろう。しかし、いずれにしても、子供たちの間にも社会というものが存在している、ということに気づかされた思いがした。

初めて子供たちと直接に接するようになった夏のキャンプの時から、私は一貫して「たとえ、子供たちがあまりにかわいくとも、心に傷を負った子供たちであろうとも、してはいけないことのけじめはきっちりつけなければならない」と思ってきた。いけないことをしたり、あるいはまた、しようとした時にはきちんと叱らなければならない、と思っている。叱るんだから自然と命令口調になる。初めは、そういう場面が多かった。叱られるのがイヤで、我がままを通させてほしい子供たちの口から、冒頭に書いたあの「ボランティア！」という言葉が聞かれたのだ。

さて、約一ヶ月ぶりに生田川児童館に入ってみると、「おねえちゃん！」と甘えたように寄ってくることが無くなっていた。私が「こんにちは！」と部屋に入ってくるのを横目で見ては、さっきまでやっていた遊びに戻る。無関心なように思えるけれども、もう、私が児童館に遊びに来るのを当たり前のことのように思ってくれているようだった。離れてしまうのではないか、と心配そうに顔をのぞき込みながら「遊んで？」と頼んでいたのが、顔も見ずに言葉も無く、いろいろなゲームを一緒にしようとしてきてくれた。「ボランティアのお姉さん」ではなく、他の子供たちと同じ友だちとして,仲間として意識してくれているみたいだった。無言のうちに、友だちとして信頼してくれているようだった。すっごく、嬉しかった。

また子供たちの間にも、不安は無くなっていた。私が望んでいたことが、形は違うにしろ、実現していた。他の子供たちに仲良く遊んでもらいたがっていた子は、一人で静かに遊んでいた。一緒に遊んでいなくても友達なのだ、という他の子に対する安心しきった信頼が、その子に感じられた。喧嘩の絶えなかった子供たちの間に平穏が訪れ、誤解や行き違いの多かった子供たちの間に、友だちとしての信頼感が生まれていた。子供たちは、同じ場所に他の子が来れば、喧嘩をしなくとも仲良く一緒に遊んでいた。私にとった同じような態度で、「寄せて」の言葉も無しに。

子供たちは衣替えした冬の私服を着て遊びに来ていた。学校の半袖の体操服にうって変わって急に大人びて見えた。

この一年を振り返って

吉田　陵太（理・２）

この一年で僕がやってきたことといえば、住友さんの外出付き添いが多い。他にもいろいろ行ってたりするが、ここでは、一番深く関わった住友さん関係、障害者関係について書こうと思う。

住友さんのところには、月２回、隔週土曜日に、大体半年くらい行っている。一年前は、はっきりいって、「何かはわからないが、何かやろう」とくらいにしか思っていなかったし、障害者と関わることについては、「いずれ、また」くらいにしか考えていなかった。それが、去年の６月頃、センターに来ていた住友さんと話していて、あることに対して驚いた。それがあったから、「一回来てほしい」と誘われて「行ってみようかな」と思ったのがはじまりだった。

その「あること」とは、住友さんと初めて話したとき、素朴に、「あ、この人は普通の人なんだ。」と思ったことだった。住友さんは、本当にただの、どっかにいるようなオヤジだった（笑）。それ以上に、そんなふうに驚いたこと自体が以外なことだった。それまでは、障害者と会った時に偏見を持たないようにしよう、と心の中で思っていたからだ。まあ、住友さんがどんな人かを全然知らなかったせいもある。けど、見かけだけで大きな偏見を持ってしまったことが、とにかくショックだった。

その後、住友さんの所に行くようになって、一つ疑問がわいてきた。「僕達が普段生活しているなかで、障害者の人のことを知らないままでいいんだろうか。」

住友さんは、外に出ようと思えば、誰かに車いすを押してもらうしかない。外出付き添いをしてくれる人がいないと、どんなに行きたいところがあっても、家にいるしかない。今は６０杉のお母さんと二人暮らしだけど、もし一人暮らしをしようと思えば、並大抵の苦労ではすまないし、できなければ、どこかの施設にいかざるをえなくなってしまうかもしれない。

障害者は、障害の程度によっても違うが、誰しもがくろうをしている。「障害というハンデをもっているんだから、苦労するのはあたりまえじゃないか。」と言う人がいるかもしれない。しかし、問題なのは、持っている障害以上の苦労、しなくてもいいような苦労を強いられている人が大勢いるということだと思う。自分のしたい生き方ができない人が大勢いるということ。原因はいろいろあると思うけど、少なくとも、障害者の現状や、障害者の人が何を考え、何を思って生きているのかを、他の人が全然知らないのは、問題があると思う。だから、僕は、僕自身がいろんな障害者の人のことを知ってみたいし、それを他の人にも、大勢の人に伝えたい、知ってもらいたいと思う。

もっとも、いまの僕は、住友さんとは友達づきあいくらいのつもりでやっているのだが。

「苦い」経験がよい

藤室　玲治（国文・４）

「社会的な活動」というのは大変である！　これが一年間を通じてやってきた素直な感想である。「いろいろと体験を深めるというのはよいことだ」と好奇心によってボランティアを始めるのは結構であると思う。しかし、「体験を深める」と言うことは苦いことも
経験するということだ。ふりかえれば、たくさん楽しいこともあった。しかし、活動を通してもし自分が少しでも成長しているとしたら、苦い経験によってこそであると思う。苦さがなければ、自分を成長させるなどという面倒くさいことはしない。

「苦さ」を味わうためには、活動に割く時間の量はあまり問題ではないと思う。現実の課題に対して自分を守らずに（すなわち、自分の果たすべき責任を自分で決め、そこから逃げずに）、立ち向かえるかという態度の問題である。

ボランティア活動を通して生み出されるべきものとは、結局のところ「変化」に他ならないと考える。もし自分もフィールドの人々の有様も活動以前に比べて「変化」していないとしたら、私はフィールドに結局「お客さん」としてしかいなかったのであろう。そしてそれは自分で自分をフィールドから離れた立場に守っているからだ。このように思うようになった。

「苦さ」というものを体験するのが、慣れるということはない。そうであればそれは本当は苦くはないものだ。ただ、敢えて言えば、回数を重ねるごとに「苦さ」を味わうことを、恐れなくなる、勇気がでてくるのではないかと思う。

石丸努（農・２）

今年一年、正直言って年とった。七月の時点でかなりきていた。一番苦しかったのは、アルジェリアテントである。しかしそういう活動こそがとても懐かしく思え、楽しかった。

僕は主にハード面をやってきた。その中で色々な人と出会った。それぞれの人が独自の考えを持っていて行動している。だから団体となって活動している僕達が独自の考え方を持っているのも当然だ。中にも不満を持っている人もいる。けれどもそういう時でも決して離れていかないで欲しい。このセンターに来たということ自体が自分の成長の第一歩のなっているのだから・・・。苦しみ、悩んでいる時こそ人は成長するものだし、今まで自分の勝ち得てきたものが発揮される。

今から大変なことが山積みであろうが、喜多代表を中心として頑張っていこう!!

牧吉世（法・3）

私は総ボラの活動に参加できたことを本当によかったと思っています。
特にボランティア活動に参加したから得たというわけではないけれど、活動をする事でたくさんの人に会い、それらの人たちと付き合っていくには自分の引きこもりがちな性格ではいけないということを知ったし、それは一般の社会についても言えることなんだろうと思います。温室でぬくぬくと育っている軟弱な私ですが、皆さんにかまって頂き少しずつ成長してきました。学生のうちにボランティア活動でも何でもいいからいろいろな世代の様々な人と知り合っておくことは、絶対に自分のためになると思っています。このように考えて今年度も総ボラに関わっていきたいと思っています。
今まで僅かですがボランティア活動をしてみて思ったことは、ボランティアって「ボランティアはこういうものだ。」と定義できないものなのかもしれないということです。「これはボランティア活動です。」と説明がされていても、実際に活動をしたときにその活動が「ボランティア活動」なのかは本人次第だと思います。（「ボランティア」の意味は難しいと思いますが、私はボランティア活動という言葉を今は「奉仕活動」の側面が強い活動ということで使っています。）私にとって今まで参加してきたボランティア活動と言われるものは、気持ちの中では奉仕の意識の殆どない、単なる自分にとって大切な人との出会いの機会でした。そして自分が成長するための時間でした。
私は周囲の人に無理にボランティアに参加してほしいとは思いません。活動を始める動機は何でもいいと思います。（私もボランティアがしたくて総ボラにはいったわけではない。）けれど、ボランティアは単なる奉仕活動ではなく、ちょっと出会いが変わっているけれど、あくまで人と人との出会いであり関わりあいなのだということを知ってほしいと思います。人と人との関わりあいだからこそ私は活動を通して少しずつ成長できたのだと思っています。
私は障害者の方の介護をしたことがないので、彼ら彼女らを適切に介護することはできません。こどもと遊ぶことも慣れていないので不得意です。（小学生に敬語を使って嫌がられたことがあるくらい慣れていない。）両親のすねをかじっている学生の私は生活に苦しさを感じていないので、これから先の生活に不安をもっている方とどう接していいのかわからないことはしばしばあります。だから、彼ら彼女らとは状況が明らかに違うのですが、でもやっぱり人と人の関わりあいなのだから、挨拶をすれば挨拶をし返してもらえるし、物を落とせば落としたことを教えてくれようとしてくれます。
他人のためになるとか自分のためになるとかいった何か利益を求めるようなことをしない、もっと素朴な人間同士の付き合いが生活にあふれてほしいと思います。そのための一つのきっかけとしてボランティアが学生をはじめ私たちの間で何か役に立てればよいと思っています。

総ボラをやってきて

総ボラで運営をやってきたメンバーがこの1年を振り返ってみました。

ボランティアセンターに思うこと

服部訓子（法・３）

「神戸大学総合ボランティアセンター」私は何度となくこの言葉を口にしてきました。この言葉を私が口に出すとき、それはすごく期待感を持ち楽しい気持ちであったり、不満や愚痴を言って嫌な気持ちであったり、常に何らかの個人的感情を伴っています。その内容の是非はともかくそこにはある人に会えたのもセンターがあったからです。そんなセンターに私は愛着を持っています。そう愛着はあるのです。でもやっぱり私はボランティア活動をやりたいのです。ボランティア活動の時間を削ってセンターの運営に関わる仕事は出来ません。今までは何が出来て何が出来ないのかを明確に言えていなかった為に、センターの皆にはすごく迷惑をかけてしまっていたと反省しています。でもこれからはそんな事はないようにもっと話し合いたいと思っています。私が考えるセンターの理念、それはいつか救援隊の発行物に書いたとおりです。（なのでちょっと省略）ここではこれからの私のセンターへの関わり方と、そのセンターに思うことを書きたいと思います。

前からやりたいと思っていた老人ホームでのボランティアをやり始めて、今一番思うのはやっぱり始めて良かったなぁということです。今は一人ですがホームの方にも理解をしてもらえています。私達はお年寄りの現実の姿を知りたい、お年寄りと身近に接することで、高齢化社会の問題を危機感を持って考える糸口にしたいという気持ちでボランティアをするということもわかってもらっています。私が、「これから何人ぐらい人が来るのかもわかりませんし、来たとしても私みたいに何もわかってないような学生が来ると思うんですけど・・・」と言ったとき、指導員の方に「でもそういう学生さんが来てくれたらすごくありがたいですし、学生時代に老人問題について考える人が増えたらその人が社会にでてボランティアから離れてしまっても、その時の気持ちを持っている限りはちょっとづつでも社会は良くなるんじゃないかしら」と言ってもらえたとき、私と同じ様なこと考えてはるーとやけに感動してしまいました。こういう老人ホームに巡り会えたことはとても幸せだなぁと思う毎日です。そのぶん一人でも多くの神大生に来てもらいたいと切実に考えています。これから私はこの老人ホームでボランティアをやり、神大生で私もやりたいなーと思う人がいれば、初めてでも入りやすいようにホームと学生の役割にしようと思っています。定期的にホームに関わる人が何人か来てくれればセンターのフィールドにしたらいいかなと思っています。私は当分そこで人間関係を作ることに励むことにします。私がそういう形でボランティアをするに当たって望むセンター像とは、出入り自由であるというものです。センターの運営に携わる運営局員ではない立場でも、入っていきやすい状態であること、そして情報交換が出来ていろんな事について話が出来る場である、そんなセンターが理想じゃないでしょうか。急に変わろうと思っても難しいと思いますが、徐々に良くなったらいいかなと思っています。どんな人でも受け入れる間口の広いセンターが理想ですね。

「早すぎたトロッコ」

四ノ宮昇（工・４）

僕が総ボラに入ったのは、95年の６月９日でした。そして次の日から、すぐに、空きコマにはセンターに来て、コンピュータをいじ　りながらだべる、という日々が始まりました。やがては、空きコマだけに、とどまらなくなってしまったのですが……

その頃、僕が総ボラに対して持ったイメージは次のようなものでした。「自分たちで押し始めて、飛び乗ったトロッコが加速しすぎて、誰もブレーキのかけ方を知らない。」総ボラに入るまで、無気力学生の代表のような生活を送っていた僕には、そんな総ボラが常に魅力的に見えました。だけど気づいてなかったんです。暴走トロッコがその先、どうなるのか。その内、放っておけば、平坦な一本道の線路を進むようになるかのように、思っていた。そんな訳が、ないんですよね。でも、それに気づかないから、夏も秋も冬も、行く先を見定めないまま、目一杯の速度で、車輪をきしませながら走り続けてしまいました。しかも、みんなが目一杯だから、お互いに話し合って、行く先を定めたり、速度を調節する知恵を出し合う余裕もないんです。ただ、振り落とされないように、トロッコにしがみつくのに必死。

今、ようやく、ブレーキをかけるチャンスがやってきたように、思います。（３月現在）新しく参加する人も乗れるように、大きな大きなトロッコで、誰も振り落とされることなく、周りの景色を楽しめるぐらいのスピードで、でも前方の行く先だけは、しっかり見据えて進んで行きましょう。もちろん、途中の線路選びも、みんなでしっかり考えて。

長い長い旅はまだ、始まったばかり。でもそれは、大学生活をかけるだけの価値ある、とても楽しい冒険のはずです。

センターについて

松本聡子（経営・４）

運営することの大変さを感じました。私自身も悪いところがいっぱいあったので大きいことは言えないです。棚に上げて言ってしまうとみんなの「ボランティアセンターをこの先どうしていくか」と言う認識が弱かったことと参画認識を持っていたかどうか疑問が残るところです。設立されてやっと１年、どたばたの中で過ぎていきましたがやっとtake offかな、と感じています。

私自身、Meetingに出ていなかった時期があったり、いい加減な気持ちになっていた時期があって良くなかったのですが、それでも一年間続いたのは、私なりの意識があったからだと思います。「ボランティア」という言葉を聞くと、人助けとか社会貢献というイメージが強く、ボランティアをする＝すごいこと、偉い人がすること、と感じてしまいがちだと思います。でも実際やってみると、「あ、誰にでも出来るな」とか「空いた時間に出来るな」という程度の意識でした。私自身はボランティアを、自己犠牲の上に成り立っているとか社会貢献だとか思っていません。むしろ、人付き合いだと思うし、視野を広げる社会勉強だと思います。ここで色々な経験をして、色々な立場を考えることの出来る、視野の広い人、片寄った物の考え方をせずにバランス感覚を持った人、人

の意見を聞く耳を持った人になって社会に出ていきたいという意識を持っています。例えば企業で働いているときに何らかの事が老人福祉と関わりがあったとき、「老人福祉なんか知らんし」と事務的に片付けるのと「あ、ちょっとは関わったことあるな」と考えて仕事をするのでは質に違いが出てくると思います。閉じてしまって自己完結になりたくない、オープンでいたいという意識が、私をセンターに留めさせた最大の理由でしょう。

センターのみんなと話し合いをして自分の意識が変化したりセンターを運営するに当たって責任と信頼性の関係を意識するようになったり、活動を通して視野が広がったりとセンターと関わったことで得た物は非常に大きかったと思います。

センターについて

牧　吉世（法・３）

私が総ボラに登録したのは６月のはじめでした。会員募集のビラにはあまりに夢のようなことばかりが、さも実行されているかのように書かれていたので、何も知らない私は総ボラが既にしっかりした活動を行っている団体だと思って、乗っかるつもりで参加し始めました。しかし、設立時に力を発揮していた人たちが就職活動などの理由で活動に参加できなくなり、気がつくと作りかけのしかも野望の大きすぎる総ボラが目の前にありました。おそらく代表の稲村さんが欲張り（いい意味で）だからだと思うのですが、総ボラはかなりの欲張りをいっている団体だと思います。ボランティアをコーディネートするだけでも大変そうなのに、さらに学生が気軽に参加しやすくするために固有のフィールドをもっています。固有のフィールドはボランティア団体が一つあってもいいような仮設住宅での活動もあり、かなり大変だと思うのですが、だからといって手をひく気はありません。さらにセンターではボランティア活動を通してみえてきた社会問題などを考えていこうとしています。
正直言ってこんな大量の仕事をやり遂げるのは非現実的じゃないかしらと思うことがあります。ボランティアという少なからず奇異の目で見られる活動を掲げていて、しかもこれほどの大量の野望を持っていて実現させるのがしんどそうな団体に入って活動しようという人間が十数人集まって活動していることは震災のおかげとしか言えないと思います。

とにかく乗っかったつもりの団体が、実は（考えてみれば当然なんだけれど）まだ作りかけでこれから続いていくかもわからないような団体だったわけで。けれど、私は総ボラの掲げている活動目的に共感したし、総ボラは大学にあってほしいと思ったし、地震から得たものとして総ボラが残っていかなければと思ったので、とにかく微力ではあるけれど、この団体に身を委ねようと思いました。

この一年間はメンバーみんなが言うように、行き当たりばったりの無計画な一年だったと思います。それが絶対的に悪かったとは思っていません。はじめから計画できるようなものではなかったんだろうと思います。渥美先生が「とにかくいろいろと考えて、工夫して、やっぱりうまく行かなかったら総ボラはつぶれても構わないと思う。」とおっしゃっていたと

思いますが、それくらい初めてでむちゃしてる団体なんだろうと思います。
この一年は稲村さんに引っ張られて何とかやってきましたが、二年目からはもっと計画性をもって、仲間同士で考えながら活動していきたいと思います。
一年間見ていて思ったことは、メンバーが震災後にボランティアを始めた人ばかりで、自分にとってのボランティアとは何なのかわからないでいたのではないでしょうか。最近になってようやくメンバーの中で、自分はどんなボランティア活動がしたいのか、総ボラの中でどのような活動ができるのかがはっきりしてきたように思います。
また総ボラのやり方も設立したばかりで誰がわかっているということもなく、自分はわかっていないのは確かだから、とにかく誰かに頼ってみようという考えが強かったようにも思います。精神的に辛いことがあったり、夏ばてをして何も考えられなくなっているときに、長く一緒にやってきた仲間なら支えあえたのかもしれないけれど、総ボラのメンバーは短い付き合いだったし、一緒に活動することもあまりなく、疲れているのでゆっくり会って話すこともしていなかったので支え合うことができなかったように思います。その一方で総ボラの大きな野望が重くのしかかって、気が滅入ってしまうメンバーが多かったのかもしれない。しかも無計画だったので、何かしたいと思っても自分は何をすればよいのかわからなかった。
二年目に入るに当たって、総ボラがこれからも続いていくにはメンバーが腹を割って話し合い、きちんとした計画を立て、みんながその計画に沿って活動し、互いに互いの行動をチェックすることが必要だと思う。今までは例えば１０人いたら、運営に関しては４人位の能力しか発揮できていなかったと思います。これからは総ボラメンバーは異端児なので、運命的に少数しか運営をしないと腹を決め、５人いたとしたら１０人分の能力を発揮できるように互いに支え高めあっていきたい。
ここにはセンターの活動の悪いところなんかを自分たちで考えて書くという事だったのだけれど、私はまだ総ボラに対してきちんと考えられていないので、自己評価は全くできません。とにかくこれからの１年間やるだけやっていきたいと思っています。

藤室　玲治（国文・４）

運営局は、単にフィールドに入るボランティアの為に雑用をこなすところであってはならない。個々のボランティアは、自分自身で考え、自分の意識と能力の範囲内でできることをすべきであって、運営局にツケを回すような存在では困るのだ。ただ、知らず知らずのうちに、個々のボランティアが自分の意識と能力を超えてしまう責任を負ってしまったり、ミスをしたりすることがあるだろう。
そのような時でも、運営局がそれを直ちに肩代わりすべきではない（明白にして、緊急な危険がある場合はその限りではないが）。ただ彼が自分でどうするかを決める手伝いをすること、彼の味わった「苦さ」に理解と共感を示し、よく話を聞き、対等な立場でアドバイスすること。それが運営局のすべき事であるし、また、運営局が実際にできる限界でもある。なんとならば、実際にはミスを肩代わりしたり、上から者を教えたりするほどの力量

も、権威も運営局には無いからである。

この1年間を振り返ると、こういうことが全く良くできていなかった。お互いの話に耳をまじめに傾けることが少なかったのでないだろうか。上手くいっていないからといって突然人から仕事を奪って、彼のプライドを傷つけながら、さらに自分の首も絞めるという愚行を行ってきたような気がする。また本来やるべきでないような仕事であると、途中で分かった仕事を、中止しようと人に相談すればよかったところを相談せずに、泥沼にはまったようなこともあった。

だけれども、今年はもう少しは旨くやれるであろう。

第５章

神戸大学総合ボランティアセンターへ

#アドバイザー委員の先生から

アドバイザー委員であり顧問でもある渥美公秀先生から１年間の総ボラの活動にたいしてご意見を頂きました。

渥美公秀（神戸大学・文学部）

あの大震災から２度目の春がやってきました。去年は、桜を愛でる余裕などない毎日でしたね。時間が経つことのありがたさと惨さを感じています。

今回の震災では、ボランティアについて多くが語られ、様々なことが論じられてきました。ボランティアに関する議論が今後とも継続していくことを望んでいます。何か胸にストンとくる説明が必要な時期に来ているように思います。もちろん、様々な実践に裏付けられた説明です。

さて、ＫＵＶＣは、今後どのような理念のもとに活動を続けていくのでしょうか？新学期を迎え、ニューフェースも増えることと思います。喧喧諤諤の議論を期待しています。 ここでは、「神戸大学総合ボランティアセンター」というものに抱く私の私的な意見を述べたいと思います。議論のきっかけにしてくだされば幸いです。

●「神戸」大学総合ボランティアセンター

震災で駆けつけてくれたボランティアだけを見て、ボランティアを論じることが片手落ちであることは言うまでもありません。しかし、ＫＵＶＣが「神戸発」である意味を、しっかりと考えていって欲しいと思います。

「君は神戸へいったか」という名（？）文句がありますが、これは神戸に行こうとしたが、どうもその気になれず、結局行かなかったために悩んでいる人にとっては、実に厳しい言葉です。「私は震災の時・・・」「震災でのボランティアは・・・」ということにあまりこだわらず、しかし同時に「神戸」にいることの意味をよくよく考えて今後の方針を立ててくださることを望んでいます。

それから、「神戸」ということを、したたかに利用することも忘れないでください。つまり、神戸以外からの発信なら取り上げてくれないことも、神戸だから注目されるということは、今もあるようです。これは、「神戸にいて、それだけのことしか言えないの？」という落とし穴も持っていますが、いい意味での緊張感を与えてくれるはずです。

「神戸」にこだわらず、それでいて、「神戸」であることをしっかりと考えていくことが大事だと思っています。

●神戸「大学」総合ボランティアセンター

ＫＵＶＣは、大学におかれています。当初の企画にも、この点を徹底的に利用しようという意気込みを感じるものが含まれていました。昨年は、「大学」であるがゆえ、公認問題で時間を取られましたが、これは「いい勉強になった」ということで納得し、早く本来の企画を立ててくださることを期待しています。「材料は揃った。さあ、料理の腕前を見せてください」といったところです。まぁ、そんなに肩肘をはらなくてもいいと思いますが、今年度は「大学」にあることを利用した企画の年になればいいなと願っています。　例えば、震災後、山のように出た「ボランティアに関する報告書」の類について、整理するなんていうことも面白いかもしれません（なんて思うのは、僕だけかなぁ・・・）。

●神戸大学「総合」ボランティアセンター

ボランティアにもいろいろあると思います。どういう意味で「総合」とついているかということを今一度考えてはどうでしょうか？何を「総合」するのでしょうか？どういう風に「総合」するのでしょうか？どうして「総合」するのでしょうか？考えることは、とても多いと思いますが、いかがでしょうか？

●神戸大学総合「ボランティア」センター

ボランティアって何？と聞かれても、答えは十人十色かもしれません。しかし、百人に尋ねれば、百種類の答えが聞かれるでしょうか？これまで「ボランティア」活動をしたり、「ボランティア」について考えてきた皆さんは、きっとある程度共通の”感覚”を磨いてきたのではないでしょうか？「ボランティア」について議論ができるということが、そもそもボランティアについて何かを”共有”しているということです。その何かは、きっと「語られないもの」だと思います。今一度、「ボランティアって何？」という問いを突き詰めてみるのもいいことだと思います。

●神戸大学総合ボランティア「センター」

センターに関しては、事務レベルも含めて、しっかり議論しておく必要があると思っています。センターの運営に中心メンバーとして関わるということは、もはや自らは（一般の）ボランティアでは「ない」ということだと考えていますが、どうでしょうか？ボランティア活動をしたいという人たち、ボランティアを必要としている人たち、こういった人々の間に立って、コーディネートしていくのがセンターの役目だと思います。従って、例えば、ボランティアの依頼が来たから、自分がボランティアとして依頼に答えるというのは、肯けません。もちろん、現実を踏まえて、様々な異論もあると思いますので、皆さんでしっかりと議論してくださるといいと思います。

長々と書きました。最後に、皆さんのこれまでの活動に敬意を表し、今後の活動に大いなる夢と期待を抱いていることを書き添えて、この辺で終わりにしたいと思います。これからの活動、楽しみにしています。また何かあれば、気軽に研究室に来てください。

#活動の中で知り合った人達から

１年近く総ボラのメンバーが介護に入ってきた住友智さんとカラオケ隊の隊長である矢野岳さんからからご意見を頂きました。

『ボランテイアをされる側に立っと』　　住友　智

私は六アイの仮設に住む、身体障害者です。昨年の三月に御影北小で、ふとしたきっかけで、稲村さんと出合いました。稲村さんの関係で当初から、総ボラとかかわりを持つようになり、そこでみんなと出会いました。今では、仲間だと思っています。

さて、本題に入ると。私はボランテイアをされる立場の立つ人間です。その立場から見れば、ボランテイアはあくまでもボランテイア、対等の立場でなく、強者弱者の関係でその間には大きな壁があると思っています。その壁をなかなか、越えられません。絶対にね。される方（弱者）から見れば、いつもボランテイア（強者）顔色を見て行動しています。ただ、一つだけその壁を越えられることがあります。ボランテイアでなく、ただの友達になることです。

それは、お互いの信頼と努力と忍耐が必要となり、そりが通したらおのずと壁かなくなり、自然に友達付き合いができる要になります。

双方の自助努力必要不可欠です　ただ、方一方の気持ちがない場合もでませんし、それと、全てのみんなにやれるかどうか疑問です。

ボランティアは、その立場を理解してボランテイア活動をしてほしいものです。

それを忘れて活動するとお互いに傷もつくし、苦い思いをすると思います。

それと、される立場からもう一つ言うと、ボランテイアが辞めても後釜さえいれば困りません、ボランテイアから見れは、ずいぶん勝手な意見だと思われますが、これがされる立場の本音です。

最後にこの言葉で締めくくらしていたたきます。

ボランテイアは代りがいるが、友達には代りがいない。

『外部団体として見た総ボラ』　　カラオケ隊　矢野岳

最初に・・・「この原稿を書くに当たって」

この原稿は、私自身の活動を振り返りながら書いています。書きながらこの１年ちょっとの間にあったいろいろな事を思い出しました。時の流れも人の心の移り変わりも早いものです。私自身、書き上げて読んだ最初の感想が「シビア」の一言。この原稿の内容は、私自身の反省と今後の思いも入っています。

このような原稿を各機会を与えてくれた事に、総ボラのメンバーに感謝の意を表し、私自身今後の活動の糧にしていきたいと思っています。

１．総ボラの印象・・・「センター？サークル？」

最初の印象は、「コーディネート」とするセンターというより、「人材派遣」の意味でのセンターという色合いが濃かった。ミーティングでは、ニーズに対しては無理してでも必ず応えるという感じであった。ただ、その仕事の内容が伴うかは別にして。震災ボランティア上がりの野武士の集団が運営していたため、粗さはあったが、ものすごいパワーが感じられた。

現在の印象は、「セクション」を運営する団体という感じが強い。まず、「コーディネート」という作業がほとんど見受けられない。複数のボランティアサークルの集まりで、「コーディネート」というよりは、セクションのメンバーが出席するかしないかが参加の第一形態になっている様に思える。ただ、その分ある程度の専門性が付きつつあるようだ。個人会員には開かれたセンターだが外部団体には使いづらいセンターになっている。セクションと外部団体ではセクションの方が優先されるからだ。組織的には、洗練されつつある。ただ、その分一気に動くパワーがないのが気になる。

２．総ボラの人　「なんでもやります？なんでもできます？」

カラオケ隊の仕事は様々である。皆、「なんでもやります」と言って来てくれた。その熱意は、ものすごく助かった。ただ、その為に指示待ちの人も多かった。まあ、私が「くれば仕事は、いろいろある」といった事にも原因があると思うが。カラオケ大会をするためには、何が必要かと考えて来た人は少なかった様に思う。また、カラオケ大会をされる方の対象の事を考えて来た人も少ない。また、仕事の内容もある程度、経験のある事になると積極的に仕事を引き受けてくれる。しかし、経験のない未知の事になるとやる人がいない場合でも尻込みする状態だった。「なんでもやります」という言葉は、「自分の出来る範囲でなんでもやります」であって、「なんでも出来るように努力します」では、なかった。この当たりは、センターとして人を派遣する上で考えていかなければ、ならないことだと思う。

3．総ボラの運営　「納期設定とタイミング」

総ボラの運営を見ていて思う事は、計画の完璧さを求める余りタイミングを逸している事が多いという事である。また、納期設定が曖昧な為、計画通りに物事が運ぶ事が少ない。何事も一番大切なのは、タイミングである。それを逃しては、努力が無駄になる事がほとんどである。その辺りをもうちょっと認識してほしい。そして、そのタイミングを逃さない為の細かい納期設定とその意識の徹底が必要である。
「１００％の計画が出来てもタイミングを逃したら役にたたない。６０％の計画でもタイミングさえあえば、
１００％を超える出来になる」

4．今後・・・「人の心とネットワーク」

総ボラは，学生の集まりである。しかし、ボランティアは、個人の活動である。社会人、主婦、高校生、おじさん、おばさん等いろんな人達がいる。いろんな人がいる。いろいろとふれあって「人の心」の付き合いをしてほしい。その中から年齢を超えた、時代を超えた付き合い、つながりが出てくる。その様な「ネットワーク」が出来て、真のコーディネートというものが出来てくる。
「学生という壁をつくらない」総ボラの活動の上でこれから気をつけていかなければならない事であると思う。

最後に・・「世界を変える」

総ボラの活動は、「学生の価値観を変え、ボランティアする事を当たり前の様にしていきたい」と聞いた。これは、一つの社会の変革で、現在の世界を変える事だと思う。この言葉を忘れず、実現を目指して活動してほしい。

「実行のともなわないビジョンは，たんなる夢にすぎない。ビジョンのともなわない実行はたんなる行為にす
ぎない。ビジョンと実行が一緒になって、世界を変えることができる。」
「戦略的ベンチマーキング」
（G．H．ワトソン著）より

＃学内団体の方から

神戸大学で活動している神戸大学学生震災救援隊のかたからご意見を頂きました。

『総合ボランティアセンターに』

神戸大学学生震災救援隊代表　　伊藤謙二

ボランティアのためのボランティアという言葉をよく耳にするようになりました。総合ボランティアセンターでは、ボランティアのコーディネートという表現をしていますね。ボランティア活動をしたいと望む個人の力と熱意を、フィールドで継続的に反映させ、ボランティアをする個人をバックアップしていくことの重要性は僕も感じています。コーディネイトする人がボランティアかどうかについては議論が分かれると思いますが、大切なのはコーディネイトとフィールド活動という役割を持ちながらも、一緒に活動しているという共通意識を持つことではないかと思います。１つの舞台を作るときのように、裏方は役者が十分な働きができるように環境を整備する努力をし、役者は自分の力を過信することなく、裏方の努力を背負って舞台に立つ。目にうつる役者の働きだけを重要視するのではなく、舞台を作るうえでみんなが主役であることを忘れてはいけないと思います。フィールドで体験してきたことをセンターの中で共有して問題提起をし、次の活動に生かしていきながら学生に向けても情報発信していくという一連の流れを考えたときに、「私はただボランティアをしたい」だとか「何のためにやっているんだろう」という声が、フィールドやコーディネートの中から出てきてはいけないと思います。何をめざして学生にボランティア活動を推進させるのか、ボランティア活動を通して学生に何を求めるのかを提言していくセンターであって欲しいと思います。

センターとQEN隊との関係を振り返ったときに、メンバー間の会話の不足から、お互いの団体が目指していくもの、取り組んでいこうとするものにたいする理解が欠け、誤解を招くこともあったのは残念に思います。ボランティアという言葉を使う使わないは別として、自分達がフィールドで体験してきたことに基づいて、学生に社会に関わること（ボランティアをすること）を求めていくという根底の部分で共通しているのではないでしょうか。それゆえに現状の活動に行き詰まりを感じたり、疑問を感じたときに、悩みの分かる隣人として叱咤激励できる関係を望んでいます。活動のスタンスに違いはあると思いますが、メンバー間の個人的な交流を深める中から、少しずつ理解を深めていきましょう。センターのみなさんのこの１年の労をねぎらうと共に、神大生のための開かれたセンターを目指してこれからも日々努力されるみなさんを心から応援してます。これからもがんばってください！

第６章

資料

１９９５年度会計報告

収入

寄付	￥７７９、８６３
助成金	￥１、２４４、０００
受取利息	￥１５７
カフェ	￥２５、２２７
計	￥２、０４９、２４７

カフェ：カフェツモローの残金

備品：コンピューター機器など

通信費：電話代、はがき代、郵便代など

消耗品：文具など

記録費：フィルム代、現像代など

宣伝費：プレス臨時号

印刷費：ニュースレターなどの印刷

修理費：印刷機の修理費

その他：講師代、花代、宅急便代など

支出

備品	￥５０８、０４８
通信費	￥８４、８３５
消耗品	￥３５、３０７
コピー代	￥１９、５００
交通費	￥３、０１０
記録費	￥１４、４６４
宣伝費	￥４０、０００
印刷費	￥６、６２５
修理費	￥５、１５０
振込手数料	￥５１５
六甲祭関連	￥３７、３２４
新歓関連	￥４、０００
その他	￥３１、９５４
	￥７９０、７３２
次期繰り越し	￥１、２５８、５１５
計	￥２、０４９、２４７

平成７年度　総合ボランティアセンター
コーディネイト実績

平成７年度の、神戸大学総合ボランティアセンターを通して活動した神大生ボランティアの延べ人数は、

519（人/日）

１回でも活動した神戸大学生ボランティアの実人数は４４人です。これは昨年度登録してくれた会員６５名中６８人にあたります。

右の表とグラフは、セクションごとのボランティアの延べ人数を表したものです。「単発」は各種イベントやお祭り、引っ越しの手伝いなどのことです。「子供」は本冊子の第２章の子供関係の活動にまとめられている活動全般、「福祉・介護」は同様に障害者介助にまとめられている活動全般の数字です。

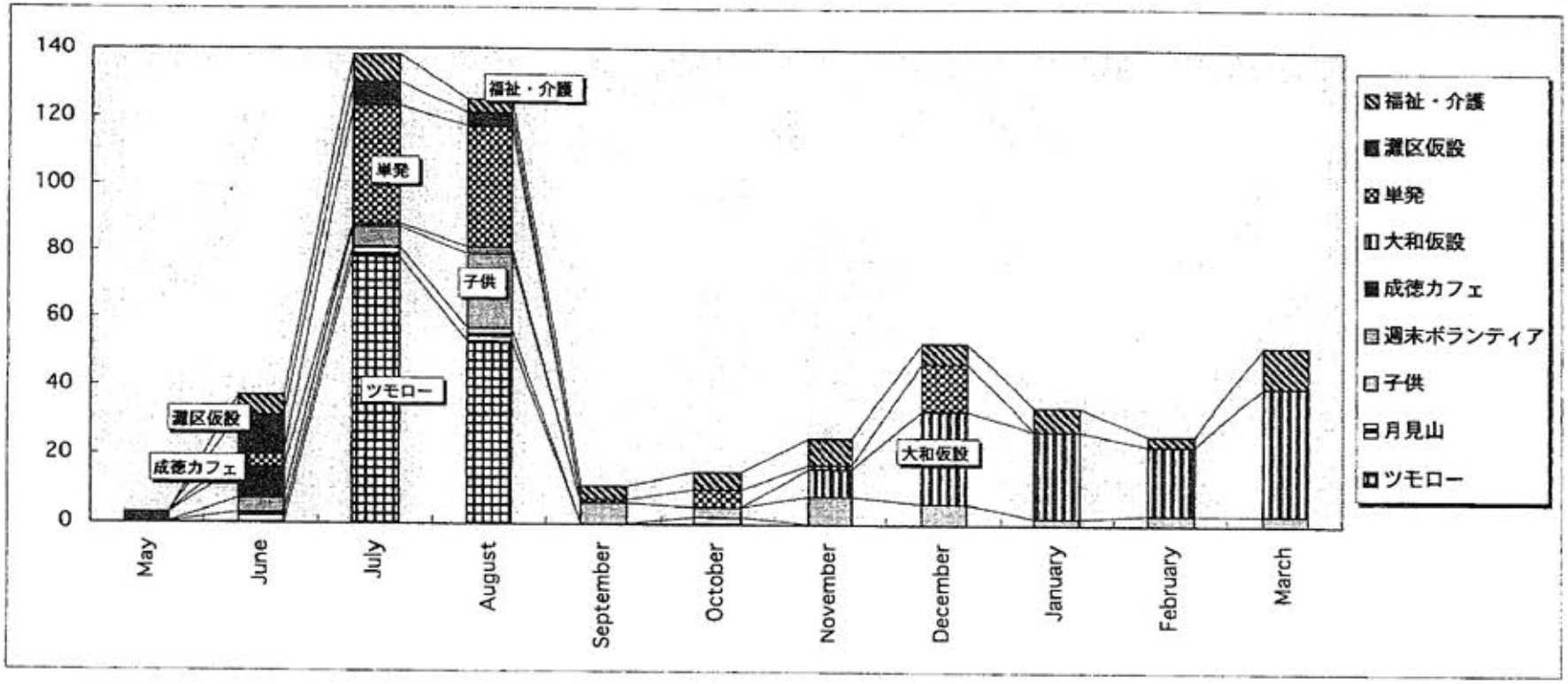
ここの活動内容については、第２章を参照して下さい。

※注意

この数字は、神戸大学総合ボランティアセンターがコーディネートした活動のみをカウントしています。センターを通さずに個々人が色々な活動に参加しているという事は、実態としてありますが、それについては記録していません。

また「カフェ・ツモロー」のようにセンターが主体で企画した活動日手も、他団体や地域の人々の参加によって運営されているので、企画自体に参加したボランティアはここの記録にあるよりもはるかに多い数になっています。

データの個数:氏名	月											
セクション	May	June	July	August	September	October	November	December	January	February	March	総計
ツモロー	0	0	78	53	0	0	0	0	0	0	0	131
月見山	0	3	3	4	0	2	0	0	0	0	0	12
子供	0	4	6	22	6	3	8	6	2	3	3	63
週末ボランティア	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	3
成徳カフェ	3	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12
大和仮設	0	0	0	0	0	0	8	27	25	20	37	117
単発	0	4	35	36	1	5	1	14	0	0	0	96
灘区仮設	0	11	7	4	0	0	0	0	0	0	0	22
福祉・介護	0	6	8	4	4	5	8	6	7	3	12	63
総計	3	37	138	125	11	15	25	53	34	26	52	519



第７章

ご支援いただいた皆さまへ

この１年間の活動の中でたくさんの方々に多大なご支援を頂きました。日々の活動をする中で、皆さまに直接感謝の気持ちを伝える機会がありませんでしたので、この場を借りてお礼申し上げます。なお日々の活動の中でお世話になったにもかかわらずこの場で取りあげることのできなかったたくさんの方々にも心より感謝申し上げます。

各種団体

（敬称略・アイウエオ順）

◎各種活動でお世話になった学内団体

AISEC
神戸大学
神戸大学学生学会
神戸大学学生震災救援隊
神戸大学手話サークルペンペン草
神戸大学障害者解放研究会
神戸大学書評サークル「流民」
神戸大学震災研究会
神戸大学新聞会
神戸大学生協
神戸大学文学部自治会
神戸大学放送委員会
神戸大学落語研究会
TRUSS

◎お世話になった学外団体

生田川児童館
鹿の子台第五仮設住宅自治会
カラオケ隊
京都商工会議所青年部
くまさんの炊き出し隊
コープこうべボランティアセンター
神戸市社会福祉協議会
子どものケアのためのNGO「楽楽」
信愛幼稚園
社会福祉法人　えんぴつの家
週末ボランティア
松蔭学生ぼらんてぃあ
震災・活動記録室

（右上へ続く）

（左下から続く）

すまいる
青陽東養護学校
青陽東養護学校避難所の元住民の皆さん
全国社会福祉協議会
鷹取中学校避難所喫茶「鷹取」
ちびくろ救援ぐるうぷ
月見山自治会
西本願寺阪神淡路大震災
　　救復興支援連絡協議会「六甲庵」
灘区中央地区ボランティア
灘区避難所連絡会
灘区ボランティアセンター
阪神障害「児童」支援の会
阪神大震災子どもを助ける会
ひまわりネットワーク
兵庫県学生ボランティア協議会
兵庫県学生ボランティアミーティング
兵庫県社会福祉協議会
Volunteer Asisst Group
大和公園仮設住宅自治会
六甲小学校避難所
六甲デイケアセンター
World NGO Network

◎金銭支援

ECC
グループ・オリザ
経団連

寄付を下さった方々

（敬称略・アイウエオ順）

磯野和美
井上定夫
上野易弘（神戸大学・医学部）
池滝忠克
加護野忠男（神戸大学・経営学部）
城仁士（神戸大学・発達科学部）
袖岡秀一（阪神大震災子供を助ける会代表）
田中章・純子
寺嶋英介（神戸大学生協）
戸嶋凡兵
南知恵子（横浜市立大学・経営学部）
中山秀木（神戸大学院生）
中谷武（神戸大学・経済学部）
藤田誠一（神戸大学・経済学部）
室崎益輝（神戸大学・工学部）
森俊英
矢野岳

アドバイザー委員

（１９９５年３月末日現在・敬称略・アイウエオ順）

渥美公秀（神戸大学・文学部）
ロニー・アレキサンダー（神戸大学・法学部）
岩崎信彦（神戸大学・文学部）
樫村志郎　（神戸大学・法学部）
鈴木幹雄（神戸大学・発達科学部）
瀬口郁子（神戸大学留学生センター）
中屋敷均（神戸大学・農学部）
南森隆司（神戸大学・農学部）
星野裕志（神戸大学・経営学部）
三上剛史（神戸大学・国際文化学部）
宮澤節生（神戸大学・法学部）
山下淳（神戸大学・法学部）

運営の継続のために寄付を募っております。神戸大学総合ボランティアセンターの主旨に賛同しご援助下さる方は下記の口座へよろしくお願いします。

さくら銀行　六甲支店（309）　普通預金3855390
（神戸大学総合ボランティアセンター　名義）